

総論

満点	60点 *1	目標得点	40点	試験時間	120分 *2	
*1…先進理工学部では学科により理科得点の重み付けを行う *2…試験時間は理科2科目で120分						
偏差値	先進-電気・情報生命工:65 応用化:65 生命医科:65					
大問数	3	小問数	42			
〔解答形式〕	選択式	22/42問	記述式	11/42問	論述式	9/42問
	描図式	0/42問				
〔問題難易度〕	C	3/42問	B	12/42問	A	27/42問
※問題難易度：C難問、B可否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す						

Topics

- 1：形式は例年通り。第Ⅰ問は小問集合であり、第Ⅱ、第Ⅲ問は実験考察問題であった。小問集合で広範囲の分野について問い、第Ⅱ、第Ⅲ問では特定の分野について問われる。
- 2：出題分野は生物ⅡのDNA・タンパク質関係にやや偏るとも言えるが、小問集合では広い知識も問われているため、特定の分野だけに偏らないような配慮が見られる。全範囲を学習しつつ入試動向に沿った分野に少し力を入れるのが良いだろう。
- 3：予想通り昨年度に比べやや易化した。これよりも易化するとは考えにくいので、おそらく来年度も同程度となるだろう。なお、昨年度いくつか出題された描図問題が出題されなかったが、来年度は注意が必要である。

こんな力が求められる！

必ず出題されるのが計算と論述であるため、素早い計算力と、文章力が要求される。普段から意識して学習する必要があるだろう。特に私立専願の受験生では多くの大学がマーク式をとっているため、文章力が不足している可能性がある。横着しないで文章を書く練習をすべきである。書いた文章は講師に見せて添削してもらうのが良い。自分ではできていると思っていても、実際には書くべきことが不足していることが多々ある。また、記述模試（お茶ゼミ模試や進研模試など）では必ず論述問題が出題されるのでよい練習になるはずだ。ここでも思わぬところで減点されていることに気づくだろう。

お茶ゼミ受講生に関して言えば、一年を通じて真面目に学習すれば自然に合格するだけの力が着くだろう。計算問題は典型的なものはすべて学習し、論述問題も数多くあたることになる。自分で書いたものを担当講師に添削してもらい、さらに自分で書き直せば万全と言える。また、年4回のお茶ゼミ模試でも計算や論述の練習になる。一般的な市販の問題集よりも問題演習量は多いため、テキストだけで十分に合格は可能である。

大問別分析

【I】

予想配点 20点/60点	時間配分の目安 25分/60分
出題範囲/分野 小問集合/生物I・II	
出題形式 マーク、計算	
小問別難易度 ※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す (1) i A ii B (2) i B ii A (3) i A ii A (4) i B ii C (5) i C ii A (6) i A ii A (7) i A ii A (8) i B ii A (9) i A ii B (10) i A ii B	
お茶ゼミカリキュラム・テキストとの関連 広範囲からの出題のため、お茶ゼミテキストの全範囲に相当する。	

●本大問の特徴・概要

例年、計算問題は計算が煩わしい。計算問題に必要以上に時間をかけると第II問、第III問に時間がかけられない。そのため、第I問ではいくつかの間をあとまわしにする必要があるだろう。

また、一般的な小問集合とは異なり、考察問題があるのも特徴である。(4)はその典型であり、用語を暗記していれば解けるわけではないので、第II問、第III問のような本格的な考察問題に対する学習を行うべきである。

●注目すべき小問

まず、考察問題の代表として(4)を挙げる。小問集合であれば、単純な知識を問われることが多いのだが、実験とその結果を表す表から考察させている。早稲田を受験する受験生であれば、実験・考察問題は練習を積んでいるはずであるが、過去問題を利用し、問題に慣れるぐらいはした方がよいだろう。

計算問題の代表として(8)を挙げる。問題文に関係式が与えられているので、これを利用するのはあたりまえなのだが、受験生はこれをどのように利用してよいのか悩んだかもしれない。また、選択式の計算問題では、正確な数値を算出する必要がないことも重要な点である。たとえば、選択肢を見ると(あ)約1時間、(い)約1日…のように選択肢の数字が大きく離れているので、細かな計算にこだわらず、概算で構わないことを示している。例えば円周率の場合、概算でよければ3.14を3.00として計算しても構わない。円周率に関してはかつて、かなり社会問題となっていたが、円周率が3.14…と知っていて、かつ概算だから3.00を使うのであれば問題ない。それは臨機応変というものだ。なお、この問いでは円周率は使わないので、誤解なきよう。

【Ⅱ】

予想配点	20/60 点	時間配分の目安	20/60 分
出題範囲／分野	タンパク質の合成から分泌／生物Ⅱ		
出題形式	記述、論述		
小問別難易度	※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す		
問1	：(1)A (2)A (3)A		
問2	：(あ)A (い)A (う)A		
問3	：A		
問4	：B		
問5	：C		
問6	：B		
問7	：P—B Q—B		
お茶ゼミカリキュラム・テキストとの関連			
・お茶ゼミテキスト9月期			

●本大問の特徴・概要

本年度の中心となる大問がこの第Ⅱ問である。昨年度の問題分析で、「遺伝情報とその発現」の分野を予想していたが、ほぼ予想通りの出題と言ってしまうのがよいだろうか。

本問は典型的な実験・考察問題であり、受験生の力量差がもつとも出たと思われる。また、近年頻出である電気泳動を利用した実験でもあり、入試動向に充分対応していない受験生は苦労した可能性が考えられる。早稲田に限らず入試動向には注意すべきである。

早稲田（基幹，創造，先進理工）では、例年、論述問題では字数制限は無く解答用紙内に収めるように書かせる形式である。問題によっては解答用紙が不足することもあるため、文章を簡潔にまとめる力も要求される。

●注目すべき小問

問3は入試で頻出である共生説の根拠を答えさせる問題である。ここを落とすようでは生物受験生としては失格である。確実に解答しておきたい。

問4以降が本格的な考察問題で、問5は「実験の方法」を答えさせているのでかなりの難問といえる。この手の問題は、原理が正しければ正解となる可能性が高いため、とにかく書いてみるのがよいだろう。しかし、なかなか思いつかない場合は、深く考え込むよりも、次の問いに進んだ方が賢明といえる。特に早稲田（基幹，創造，先進理工）の場合、「取れる問題を取る」ことが合格点をとるための最良の手段である。

問6は「機能」ということを考えるとかなり解答しづらい。しかし、これも思いついたことを書くしかないさそうだ。

【Ⅲ】

予想配点	20点/60点	時間配分の目安	15分/60分
出題範囲/分野	被子植物の重複受精/生物Ⅰ		
出題形式	記述、論述		
小問別難易度	※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す 問1：(イ)A (ロ)A (ハ)A (ニ)A (ホ)A 問2：A 問3：A 問4：A 問5：B 問6：B		
お茶ゼミカリキュラム・テキストとの関連	・お茶ゼミテキスト5月期		

●本大問の特徴・概要

例年に比べ、第Ⅲ問が非常に取り組みやすかった。そのため、本年度は例年より易しくなっている。ここでも、昨年予想していたとおりに「生殖と発生」の分野が出題された。それほど偏った出題傾向ではないため、予想しやすいと言える。

本問は、現行課程となってから頻出といえる花粉管の助細胞による誘導に関する問題で、第Ⅱ問と同様に入試動向に沿った問題である。これは早稲田（理工）の過去の傾向からも言えることであり、本年度に限った話ではない。

●注目すべき小問

問3でも先の第Ⅱ問の問5と同様に、実験の方法を考えさせている。このことから、受験生には柔軟な思考力を期待していると言える。柔軟な思考力をつけるには、やはり普段からの学習法を見直す必要がある。例えば、受験生が行っている安易な学習法として、一問一答式の問題集を使う方法がある。一問一答式の学習では、簡単な問題には答えられても実験・考察問題には対応できず、このような実験方法を考えさせる問題に至っては言うまでもない。さらに、意外かもしれないが、一問一答式の学習では問1のような空欄補充問題すら対応できない。空欄補充問題は文章の前後関係から空欄に入る用語を考える必要があるため、単純な学習では対応できないことを知っておくべきである。

問6は「被子植物の生存上」という言葉を考えすぎるとかなり難しいが、おそらく、ここでの「生存」とは、種としての生存のことであろう。特に本年度の早稲田（基幹，創造，先進理工）では、このような言葉の解釈が難しい問題が多数出題され、受験生は問題そのものの難しさというよりも、むしろ解釈の難しさにより困ったものと推測される。そのため、受験生としては、設問中の単語に関してある程度幅広く考える必要があるだろう。過去問題にあたることはそのような意味でも重要である。